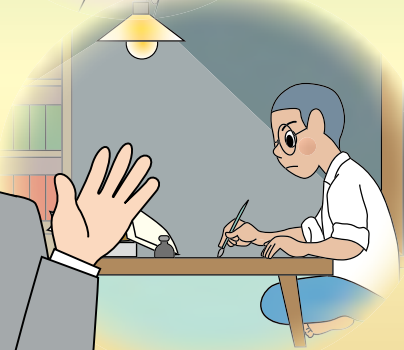
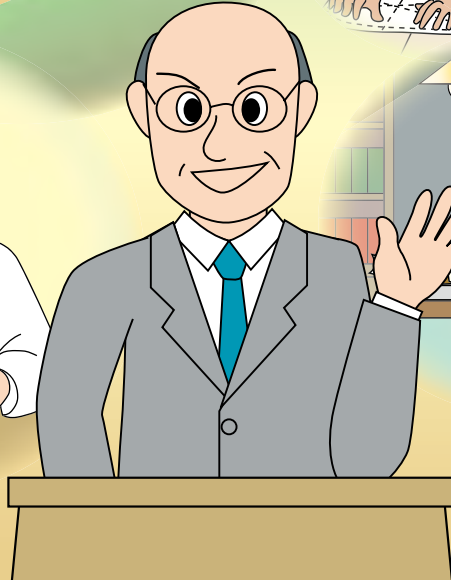
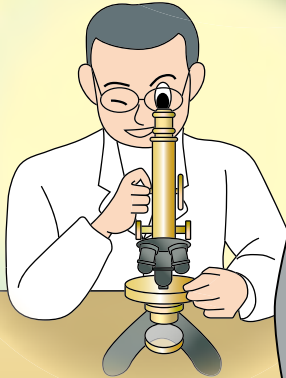
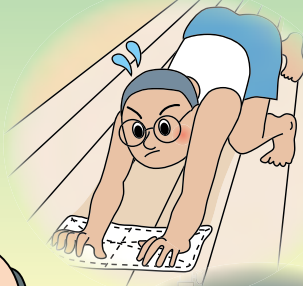
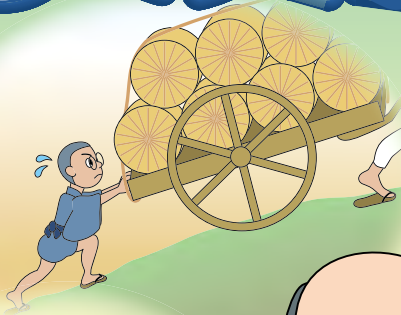


きょうど う いたい こうがくしゃ  
郷土が生んだ偉大な工学者

み しま とく しち  
三島徳七

ものがたい



まず、貧しい家庭に生まれ育ちながらも志を高く  
持って周囲の人々に支えられながら世界最強  
のMK磁石鋼を發明した三島徳七博士。

博士は明治26年2月24日、ここ五色町広石  
下で生まれました。

では今から三島徳七博士の業績と、博士を  
支えてきた人々をご紹介します。

徳七少年は淡路の靈峰先山千光寺の西、

広石川を見渡せる家で生まれました。

男5人、女2人の7人兄弟の末っ子でした。

えびすさんのまつりの日に生まれたことから  
神の徳にあやかって徳七と名づけられたそう  
です。



「すもうだしい!! すもう」

「よし、かかってこい！」

「がんばれ、がんばれ!!」

「のこった、のこった、のこった」

「徳ちゃんにはかなわないよ！」



「よくまあ こんなに破れること。」

「これ以上破れたらどうしようかねえ…」

「さあ、いくぞ。しっかり押せえ

でないと学校に遅れるぞ！」

「わかってるよおヨイシヨ、ヨイシヨ…」

「しっかり押さんか！」

「ヨイシヨ、ヨイシヨ」

徳七少年は朝早くから夜遅くまで

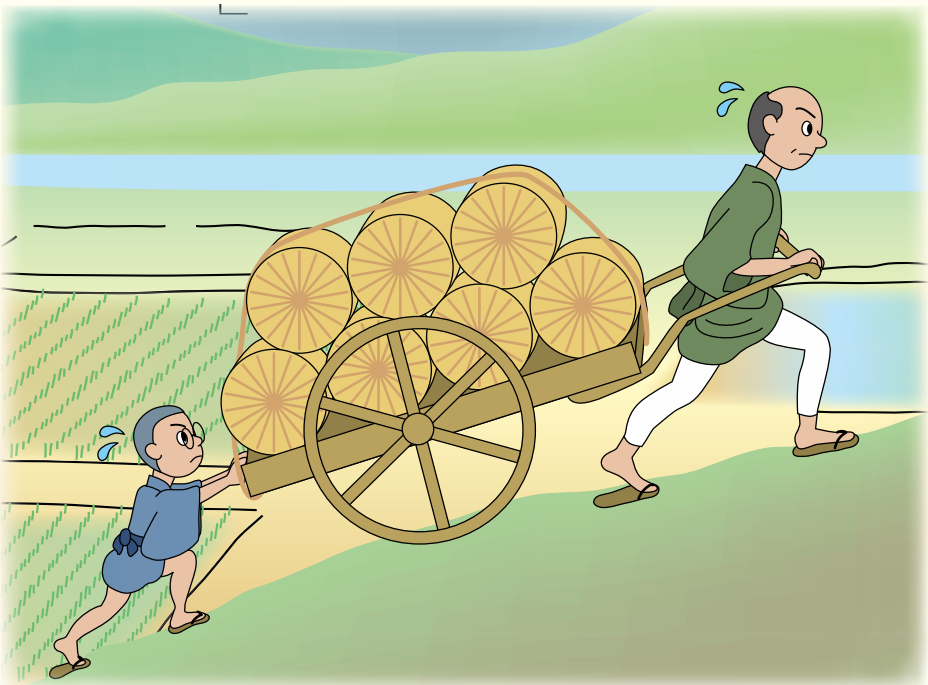
家の手伝いをすすんでしていました。

「さあ着いた、ご苦労様。急いで学校へ行け!!」

「うん、いってきまします！」

「お、おいおい、転ぶなよ」

「わかってるよ」



徳七少年はあまり勉強はしなかったようですが学校の成績はよかったようです。そして明治40年のこと。

「おまえは中学校へいかなのか？」

「でも…いいです」

「うん…」

このとき川崎先生にはある考えがありました。



「だめじゃ。何を考えとる！」

徳七は中学なんぞ行かなくてもいい。

それにこの年で

中学校へ行ったら

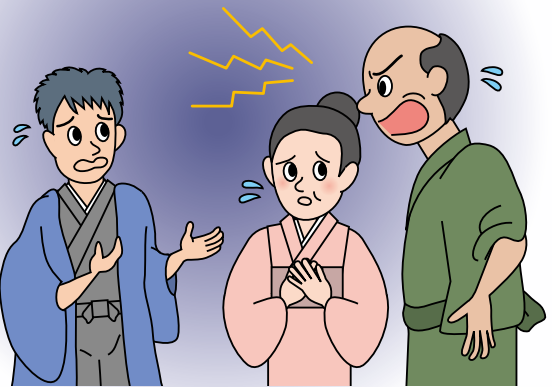
徳七のこれからの

人生にとってよい

ことはないぞ。

絶対だめじゃ！

わしゃ許さん。」



ここまで反対されれば中学校行きはあきらめなければなりませんでしたが勉強だけは続けさせてやりたいと思

「いかがですか？みなさん」

「川崎先生がそこまでおっしゃるなら…なあ、みんな。しかしすごい惚れこみようじゃなあ、先生。」

「あの子は何かを持っていますよ。」

「うんうん、よし、じゃあ全員一致で賛成と

いうことじゃな。あの子の中学校の学費を村で出費することについては」

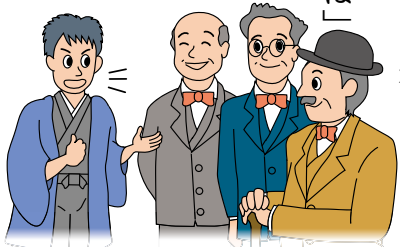
「賛成じゃ」

「わしもじゃ」

「いいんじゃないか」

「ありがとうございます。」

ではこれから甚平さんに報告してきます」



「川崎先生のお頼みとあればむげに断るこ

もできませんな。まあ、よこして下さい。

悪いようにはしません。」

「ありがとうございます。」





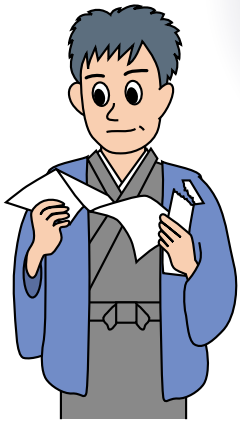
『川崎先生、  
徳七少年は進学をあきらめ、  
和歌山の坂本中佐の書生として  
あらたな人生を踏み出したのです。』

『川崎先生、

立教中学校編入試験を受験するにあたり

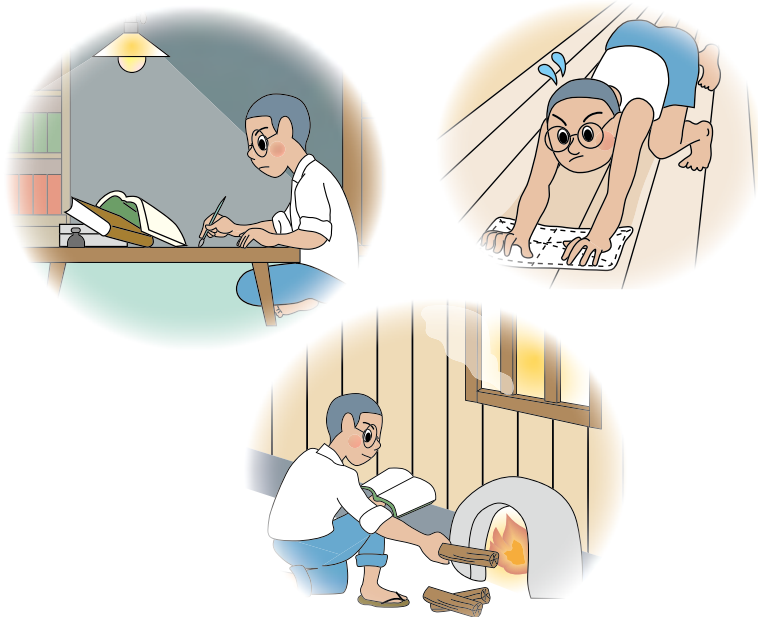
このままでいいのか

大変不安をいただいています。』



徳七少年の悩みを知った川崎先生は  
広岡宇一郎弁護士を紹介したのです。

家の雑用をこなしながら家庭教師を  
困らせるほど勉強に打ち込む毎日でした。



広岡弁護士は、徳七少年と同じ淡路島の

出身で苦学して弁護士になった人です。

少年徳七に自分の姿を重ね合わせていた

のかもしれない。

中学校への編入試験5ヶ月前のことです。

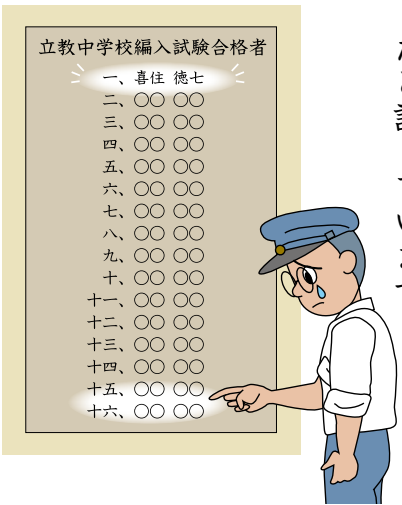


試験の結果に自信がなく合格をほとんどあきらめていた徳七少年は、

「やっぱり、だめだったか…」

合格発表の張り出しに自分の名前があるのを見落としてしまったのです。徳七少年は一番の成績で編入試験に合格したのです。

この合格は後日文化勲章を受けたときよりも嬉しかったと語っています。



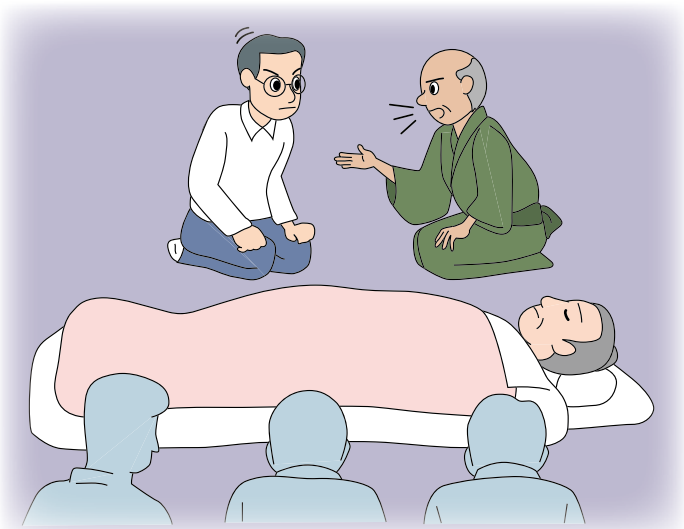
昭和2年12月、母ことが亡くなりました。

「徳七、おっかさんはお前が博士になるのを楽しみにしていたのに

その前に死んでしまった。

村のみなもお前が博士になるのを楽しみにしている。どうしたらなれるのかは知らんがおっかさんの一周忌までには博士になって帰ってきてくれないか。」

「わかりました。必ず博士になってみせます。」

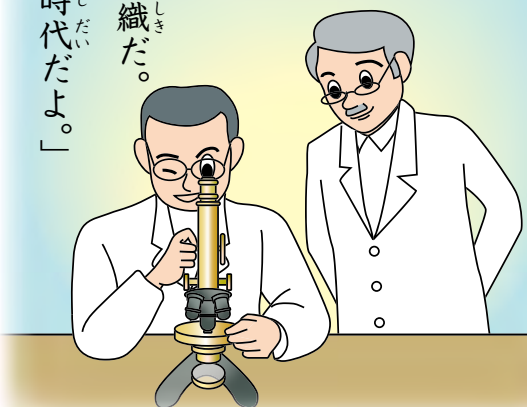


立教中学へトップで合格しトップで卒業した徳七青年は、一高、そして東京帝国大学、今の東京大学に入学しました。

「先生、これはなんですか？」

「鉄だよ、鉄の組織だ。」

これからは鉄の時代だよ。」



顕微鏡との出会い、俵教授との出会い。

この出会いが徳七青年の進路を決定したのです。

ずいぶんとせっかちな願いでしたが徳七は約束通り工学博士になり母の一周忌に広石村へ帰ってきました。家族や村のみんなはとても喜んだのです。

そして昭和5年のある日のことでした。

「君、まだできないのかな、待っているんだよ。」

「先生、何か変です。うまくいかないんです。」

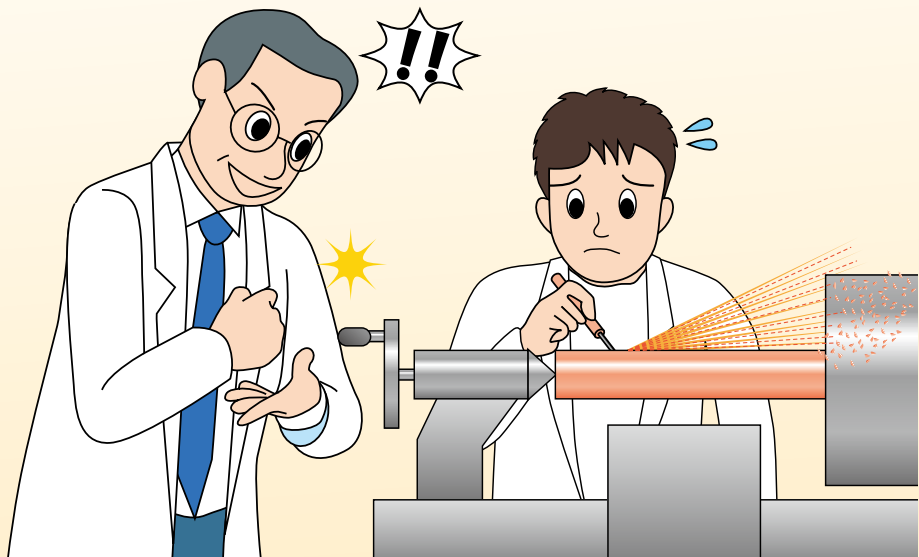
「ん…削りくずが旋盤にくっついたままなのか…」

「はい、そうなんです」

「これはこのサンプルの磁石のせいじゃないのか」

世界中を驚かせた強力な磁石、

「MK磁石鋼」が発見された瞬間です。



それからというもの昼夜を問わず徹底的に調査研究を行い、国内外へ特許を出願したのです。

その後の改良によってこの発明は人類文化の発展、近代産業の進歩に大きな役割を果たしました。



さらに博士は鉄鋼の技術及び基礎研究について産学協同体制をつくることを提唱されその後、関係する機関の意見が一致して実行されたのです。



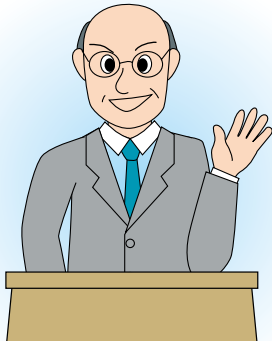


# 三島良績博士

三島良績博士は原子力安全性の世界的権威者で、原子力の平和利用と安全確保のために、自らの研究と共に学会の指導者として重要な役割を務めた世界的な工学博士であります。



文化勲章を受けられた博士は地元の高校で次のような言葉を残されています。「自分で自分の環境と立場を考えて最善を尽くすよりはかない。努力せずして得られるもの、これは嘘の幸福である。私などは偶然貧しい家に生まれたが努力して幸せになった。また、若い皆さんに望むことは大きな希望を持ち、人一倍の努力をして下さい。その努力があれば必ず希望は達成できます。知能を磨く努力こそ未来を切り拓く道となります。」とも語っておられます。



良績博士は大正10年、徳七博士の長男として東京に生れ、昭和19年東京大学卒業、同24年東大工学部大学院を修了して助教となり、冶金学担当を経て38年原子力工学科の核燃料工学、基礎工学の教授となり、日本の原子力開発創世期からの第一人者であります。ジルコニウム合金の研究は、原子炉材料としてその安全性に大きく貢献し、世界の学会から注目されると共に、世界的な名誉賞であるクルール国際賞を受賞。また、原子力平和利用研究への貢献により、米国原子力学会よりシーボルク賞が授与されました。



▲三島良績博士の著書  
▼ジルコニウム合金の研究は、原子炉材料としてその安全性に大きく貢献し世界の学会から注目されました。

良績博士は専門の原子力工学の他に、昭和21年博士の発案で東大切手研究会を結成。自ら撮った写真が郵政省(現郵便事業株式会社)発行切手の構図用写真として採用される等、切手製造への貢献により郵政大臣表彰を受けました。又、50年から7年間東大の野球部長も務めるなど趣味、スポーツの分野でも活発な活動をされました。

三島博士は多くの人たちに助けられながら人一倍努力した方です。子ども頃、村をあげて博士を進学させようとした郷里の人達に恩返しをしようと三島育英資金が創設され、その後その思いと志は長男三島良績博士に引き継がれて「三島育英基金」が設立されたのです。このことよって時代を担う多くの若い人たちがその可能性を伸ばしています。

現在、三島博士顕彰会が組織され青少年の健全育成と徳七博士と良績博士の功績を顕彰しています。博士の意思は脈々と受け継がれているのです。

西暦 (年表)	できごと
1921年(大正10年)	8月5日 東京で、父徳七、母三三子の長男として生まれる
1942年(昭和17年)	4月 東京帝国大学第二工学部冶金学科入学
1945年(昭和20年)	1月 大東亜会館(現・東京会館)で百島恒子と結婚
1949年(昭和24年)	9月 東京大学大学院修了
1952年(昭和27年)	12月 東京大学第一工学部付属総合試験所専任助教
1963年(昭和38年)	10月 東大75年記念切手発行(良績博士の撮影した写真が原因となった)
1964年(昭和39年)	3月 東京大学工学部教授
1971年(昭和46年)	日本金属学会功績賞受賞
1971年(昭和46年)	日本原子力学会賞受賞
1971年(昭和46年)	第1回原子力学会賞受賞
1982年(昭和57年)	4月 東京大学退官
1982年(昭和57年)	5月 東京大学名誉教授
1984年(昭和59年)	子タン30年功労賞受賞
1984年(昭和59年)	郵政事業功労により、前島豊賞
1985年(昭和60年)	金属学会への貢献により、村上記念賞受賞
1986年(昭和61年)	高融点金属研究と工学標準化への功績により、米ASTM功績賞受賞
1988年(昭和63年)	ジルコニウムへの貢献により、クルール国際賞受賞(受賞決定は昭和61年)
1988年(昭和63年)	日本原子力学会会長(平成2年)
1990年(平成2年)	日本学術会議会員(平成3年)
1990年(平成2年)	フランス金属学会名誉会員
1994年(平成6年)	11月 原子力平和利用研究への貢献により、米原子力学会(ANS)シーボルク賞受賞
1994年(平成6年)	11月 中華民国技能学会賞
1994年(平成6年)	技能師範を受取る
1995年(平成7年)	5月 米国ASTMシンポジウムアワード・メダルを受取る
1996年(平成8年)	8月 米国原子力学会(ANS)に「三島賞」設立
1996年(平成8年)	2月 食道がん手術を受ける
1997年(平成9年)	1月 国際原子力学会協議会(TNSC)会長(平成8年12月)
1997年(平成9年)	11月 勲三等旭日中綬章受賞
1997年(平成9年)	1月12日 死去。75歳





郷土が生んだ偉大な工学者 三島徳七ものがたり

平成23年8月1日発行

発行者 三島博士顕彰会

〒656-1334

兵庫県洲本市五色町広石中90-5

五色地域福祉センター「みやまホール」内

TEL 0799-35-1166 FAX 0799-35-1167

H P <http://www.tada.biz-web.jp/>